

I P M実践指標モデル（ネギ）

管理項目		管理ポイント		チェック欄
		取組内容	メモ	
予防	防除計画の作成	栽培開始前に、年間の具体的な病害虫防除計画を作成する。		
	健全種子の確保	病害発生予防のため消毒された種子を使用する。		
	健全苗の確保	セル育苗では病原菌に汚染されていない培養土や資材を用いる。地床育苗では前作で病害・雑草の発生のない育苗圃場を利用する。	・地床育苗の場合、汚染の可能性のある育苗圃場では土壌消毒を行う。	
		適正な播種量、施肥量を守り、多湿や過乾燥を避け、高温にならないように管理する。		
		害虫の侵入を抑制するため、施設開口部にネット被覆や粘着トラップ等を設置する。	・ネット被覆をする場合、温度や通気性に注意する。	
		育苗中に病害虫の発生を確認したら、早期に防除、除去する。		
	圃場の選択と改善	作物の栽培に適した水はけの良い圃場を選択する。排水の悪い圃場に作付けする場合は、明渠、高畝等の排水対策を講じる。		
		他作物や緑肥等との輪作を行う。	・例）カラシナ、アブラナ科植物、ソルゴー等。 ・ロビンネダニの発生圃場ではジャガイモ、サツマイモの輪作を避ける。	
		土壌診断結果を参考にして、塩基バランスを調整し、適正な土壌pHに矯正し、適正な施肥を行う。	・参考：三重県施肥基準	
		圃場に有機物を施用する場合は未熟なものを避ける。	・タネバエや白絹病の被害を防ぐ。	
		病害の発生履歴に基づき、発生圃場から未発生ほ場への病原菌の持ち込みを避ける。	・耕起の順番に配慮する。	
		圃場内に残存する菌核を防除するため、湛水処理を行う。	・白絹病等	
	本圃の準備	前作等の病害虫の発生状況を踏まえて土壌消毒を行う。	・太陽熱消毒。 ・農薬による化学的防除。	
		黒腐菌核病対策として、定植前にコニオチリウム・ミタンス剤を処理する。	・生物農薬の利用。	
		定植期に農薬を散布し、その後の病害虫の発生を有効に抑制する。		
		雑草は病害虫の発生源となるため、前作及び圃場での発生状況、草種等を確認し、適切に除草する。 青ネギの場合、マルチを活用する。	・播種までに雑草が発生した場合、種子の結実前に耕起耕耘を行う。 ・多年性雑草は地下茎まで抜き取り、適切に処分する。	
		施設では、ネギアザミウマやネギハモグリバエ対策としてUVカットフィルムを展張する。		
		施設ではハウス開口部に防虫ネットを展張し、露地栽培では防虫ネットによるトンネル掛をすることで害虫の侵入を抑制する。	・シロイチモジヨトウ、ハスモンヨトウ、ネギハモグリバエ、ネギアザミウマ等を対象におこなう。 ・0.8mm目合いの防虫ネットを利用することでネギハモグリバエの侵入を抑制できる。 ・赤色防虫ネット(0.8mm目合い)を利用することでネギアザミウマの侵入を抑制できる。	
		圃場内に黄色光源を設置し、夜間に圃場内を照明する。	・シロイチモジヨトウやハスモンヨトウの飛来と産卵を抑制する。	
		交信攪乱フェロモン剤を利用して、設置地域内の害虫の産卵数を抑制する。	・シロイチモジヨトウ、ハスモンヨトウ。	
判断	病害虫発生予察情報の確認	病害虫防除所が発表する発生予察情報を入手し、利用する。		
	病害虫防除の要否の判断	圃場内を見回り、病害虫の発生や被害を把握する。気象予報等を考慮して防除の要否を判断する。		
		フェロモントラップを利用して害虫の発生消長をモニタリングし、防除時期を把握する。	・シロイチモジヨトウ、ハスモンヨトウ。	

I P M実践指標モデル（ネギ）

管理項目		管理ポイント		チェック欄
		取組内容	メモ	
		粘着トラップを利用して害虫の発生量をモニタリングし、防除の判断に利用する。	・ネギアザミウマ、ネギハモグリバエ。 ・粘着トラップの色：黄色、青色。	
防除	軟腐病 （生物農薬の利用）	軟腐病対策として、発病前～発病初期に生物農薬を散布処理する。	非病原性エルビニア・カロトポーラ水和剤、シュードモナス・ロデシア水和剤など	
	ネギアザミウマ （生物農薬の利用）	ネギアザミウマ対策として、発生前～発生初期に生物農薬を散布する。	・ボーベリア・バシアーナ剤、メタリジウム・アニソプリエ剤など	
	圃場内、周辺の除草	雑草は病害虫の発生源となるため、圃場内や圃場周辺を除草する。 白ネギの場合、中耕・土寄せし、除草する。	・除草剤の活用 ・太陽熱消毒で種子を不活化	
	農薬の適正使用	薬剤抵抗性の発達を防ぐため、同一作用機構の薬剤の連用を避け、作用機構が異なる薬剤を組み合わせたローテーション散布を行う。	・FRACコード、IRACコードの活用。	
		農薬散布を実施する場合は、適切な飛散防止措置を講じた上で使用する。	・風の強さ、風向きに注意する。 ・散布圧力、散布の位置・方向、ノズルの選定を適切にする。 ・障壁作物を作付ける。	
		土着天敵に配慮した薬剤を選択する。	・BT剤。	
		発生が拡大してからでは防除が困難であるため、予防的または発生初期に散布を行う。		
	圃場の衛生管理	軟腐病等の発病株は、発見次第、早めに抜き取って圃場外に持ち出し、適切に処分する。		
	収穫残さの処理	収穫後の残さは病害虫の発生源となるため、速やかに圃場外に持ち出して適切に処分する。		
その他	作業日誌の記帳	各農作業の実施日、病害虫・雑草の発生状況、農薬を使用した場合の農薬の名称、使用時期、使用量、散布方法等のIPMに係る栽培管理状況を作業日誌として別途記録する。		
	研修会等への参加	県や農業協同組合等が開催するIPM研修会等に参加する。		